

国際室 だより

No. 53

最初で最後のコースリーダー顛末記（地下水資源開発 集団研修コース閉幕） その2

<研修生決定>

前号で書いたような事情で、研修生を以下のように決定しました。

1. アハメドさん(エジプト) Mr. Ahmed Abd El Wahab Abd El Razek 32歳, 土地改良農業開発総合機構地下水局地質官
2. サトリヨさん(インドネシア) Mr. Satriyo Hadipurwo 32歳, 環境地質局水文地質課員
3. ザヒッドさん(パキスタン) Mr. Zahid Fasiq 32歳, パンジャブ州灌漑動力局主任技師補
4. ラコトさん(マダガスカル) Mr. Rakotoarimanana 38歳, 工業エネルギー鉱業省エネルギー水局都市水供給課長
5. ボニフェスさん(ルワンダ) Mr. Munyagatanga Boniface 37歳, 公共事業エネルギー省プロジェクトマネージャー
6. ジットラコーンさん(タイ) Mr. Jittrakorn Suwanlert 28歳, 公共事業省地方給水局水文地質課水文地質官
7. ヴィタさん(ザイル) Mr. Vita wa Ngongo 32歳, 地方開発局地方水理事業課長
8. (マリ) 決定していた研修生が先方の事情で、研修が始まって来日できなかったため、JICAとも相談の上残念ながら合格取り消しとしました。この国からの研修生は、いつも真面目で優秀な人が多く、今回も期待していたのですが、大変惜しいことをしました。

<研修生との出会い>

7月5日、コースの開講の前々日、国際協力事業団筑波インターナショナルセンター(TBIC)で、初めて研修生と会った筆者は、彼らが大変ジェントルマンなのにびっくりしました。何故ならば、毎年1人や2人はヤクザな(という用語がありますが、コースを掻き乱す)研修生がいたものです。今年はとくにむさくるしい男ばかりですから(数年前の時は10人中3名もの女性がいたのに、何で俺がコースリーダーの時は、かわいい女の子がいないのかヨ-

と、嘆くことしきり)ヤクザもんがいることは最初から覚悟していたのです(研修生からしてみれば、何の事はないコースリーダーの筆者が一番ヤクザもんであったのですが……)。彼らと初めて握手したときの感触は、未だに忘れることのできないとても気持ちのよいものでした。今にして思うと、この時の手の温もりが、彼らとの心を開いた交流の始めだったのです。

<運営委員会と研修生歓迎パーティーの開催>

前号で記述した先生がたおよび、(株)興和から熊谷忍氏にも委員に加わっていただき、7月6日運営委員会を本所で開催しました。この席で今年度の計画を承認していただき、同時に、個別研修先を決定しました。個別研修先と指導者は、応募用紙に記入することを課した個別研修希望課題や、研修生自身の教育的バックグラウンドを基に、以下の通り決定されました。アハメドさん(筑波大・鈴木裕一氏)、サトリヨさん(三重大・森和紀氏)、ザヒッドさん(秋田大・肥田登氏)、ラコトさん(地調・石井武政氏)、ボニフェスさん(京都大・北岡豪一氏)、ジットラコーンさん(地調・田口雄作)、ヴィタさん(興和・熊谷忍氏)。

毎年、本所が主催するささやかな研修生歓迎のパーティーは、開講式の後に開催されるのですが、今年は後のスケジュールの関係で、開講式の前日に行うことにしました。この日、本所で開催された運営委員会に出席された運営委員の方々にも、当然参加していただきました。7名のうち、ボニフェスさんがまだ来日しておらず、研修生6名とホントにささやかでしたが、彼らと個別研修先の先生がたとの、はじめての出会いの場としての暖かい歓迎会となりました。

<開講式とカントリーレポート発表会>

7月7日、七夕の日午前、6名の研修生、本所からは井上所長(当時)、藤井氏はじめ研修関係者、TBIC側からは武井所長、高杉氏はじめ本コース担当者が出席して、開講式が本所で行われました。いよいよ研修が始まると思うと、厳粛な気持ちでトータル緊張しました。

その日の午後は、研修生によるカントリーレポート発表会。もちろん運営委員の方々にも出席していただいて、大いに意見を言ってもらおうというのが、筆者の魂胆。ただし、各国の地理をドラドラと紹介されても意味

はないので、あらかじめ準備するように指示しておいた各国の地下水問題について、発表時間わずか15分。時間が短かすぎると思うかも知れませんが、学会発表と同様、要領よくまとめれば、これで十分。研修生を受け入れる側にとっては、彼らの本研修に対する取り組み姿勢と、プレゼンテーションの能力を知る絶好の機会なのです。全体的な印象は、おおむね合格。しかし、中には、このような発表会があることを、事前に知らせていたにもかかわらず、図表1枚持ってきていない不心得者もいて、前途多難という感じを受けた研修生も見受けられたことは残念でした。

<抜打ちテスト>

教える側にとって一番困るのは、研修生が地下水に対してどの程度の知識を持っているか、かいても判らないことです。授業中はフムフム諾いていても、いざ演習をやらせてみると、トンチンカンなことをやっていて、まったく内容を理解していないということがよくあります。それではいけないということで、ある講師が、研修生の実力を知るために、事前の連絡なしに抜打ちテストを実施して見ました。テストの問題は専門用語の説明で10題。時間は10分程度。したがって解答は数分で十分。受験者6名。結果は次の通り(正解2点、不十分な答1点、不正解0点で計算、すなわち20点で全問正解ということになります)。

問1 capillary fringe 6点, 問2 Darcy's law 6点
問3 hydraulic diffusivity 3点, 問4 equation of continuity 5点, 問5 Jacob's formula 4点, 問6 base flow 5点, 問7 residence time 2点, 問8 key diagram 2点, 問9 environmental isotope 1点, 問10 tensiometer 2点

さすがに各国の代表だけに、各研修生はよく勉強ができるのですが、教育の背景を反映してか、水理学方面にやや偏りが見られるようで、水文学や地球科学分野はチョット苦手なようでした。個人別に集計して見ると、問題が10題で満点は20点となりますが、最高点10点が1人、7点が2人、5点が1人、最低点4点が2人という成績でした。誰が何点であったかは、個人の名譽のため、絶対に口外しないことにします。

内緒の話ですが、講義が始まってすぐに実施されたこの抜打ちテストは、研修生の間では、エラク不評を買ったようです。しかし、その逆に、後の講師陣にとっては、その結果が授業を進めるうえで、非常に参考になったと好評ではありました。

<個別研修こぼればなし>

2か月間のグループ研修の後、筑波に残る3名以外の研修生たちは、個別研修のため各地に赴きました。個別

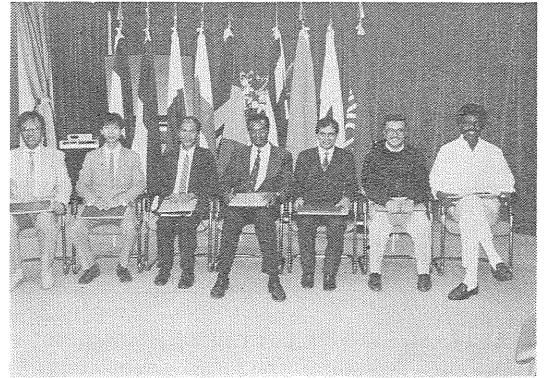


写真 修了証書を手喜びの(左から)サトリヨ, ジットラコン, ラコト, ボニフェス, ザヒッド, アハメド, ヴィタの各氏。

研修先では家族ぐるみで、公私にわたって面倒を見ていただいた各先生方を始め、教室や職場の方々には、様々な形でお世話になりました。公的なつながりは別として、民間大使としての研修生が地元の人々と交流した心温まるこぼればなしを、ひとつ紹介しましょう。

パキスタンのザヒッドさんは、研修の途中からとってきれいな奥さんと、かわいい3歳のシュマイル君を本国から呼び寄せました。秋田の公園でシュマイル君が遊んでいると、同年齢くらいの男の子と仲良しになりましたが、子供同志、すぐに意志を通じ合うことができるようになり、それをきっかけに、家族ぐるみの交際が始まりました。お互いの家庭に招待し合ったり、プレゼントの交換をしたりして、とてもすばらしい一時を過ごすことができたということです。しかし、ザヒッドさん夫婦にとっては日本語がうまく話せない。相手のご夫婦は英語がカタコト。いつも肝心の所で言葉が詰まってしまうマドロッコシイ思いをしたそうです。秋田を離れるときはホームまで見送りに来てくれて、涙みだのお別れだったということです。

そのほかの研修生も同様の体験をしたようですが、みな異口同音にいうことは「モットニホンゴガハナセレバヨクッタノニ……」。来日当座の僅かの日本語研修だけでなく、経常的なトレーニングの必要性を、すべての研修生は心から訴えています。

<これで研修終ワリーっ!>

10月23日 TBICで閉講式が行われ、7名の研修生全員に修了証書が手渡され、これで研修はオワリーっ! 当所が主管する本コースも、今年でオワリーっ! 最初で最後のコースリーダーも、曲がりなりに勤め終わり無罪放免。皆さんアリガトウゴザイマシタ。(田口)